

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
58

振興協議会だより

〔発行日〕令和4年12月21日
〔発行〕苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕025-765-1600



再認定審査が実施されました

11月8日（火）～10日（木）の3日間、4年に1度の再認定現地審査が行われました。振興協議会だより57号で紹介しました香川大学の長谷川修一先生と鳥海山飛鳥ジオパークの専門員である大野希一先生に現地調査員としてお越しいただきました。当地域の調査結果をまとめられた後、日本ジオパーク委員会において認定についての審査が行われます。

3日間の行程では、新型コロナウイルス感染症の影響により当初の予定から変更となった点もありましたが、天候にも恵まれ、認定ジオガイド、振興協議会の各部会長、地域の方々から活動を報告してもらするなど多大なご協力をいただきました。

1日目は、ニュー・グリーンピア津南にて苗場山麓ジオパーク認定商品である「マグマソースの津南ジオカレー」を召し上がっていただき、開発に関わったスタッフから説明をしていただきました。さらにジオガイドから谷の展望台にてエリア全体を紹介しました。その後、農と縄文の体験実習館なじょもにて、部会長から4年間の活動報告をしていただきました。今後は、部会同士の交流、特にガイド部会と他の部会が連携していくと良いとご指導いただきました。その後、(有)松屋と苗場酒造(株)にて、認定商品の「山麓サブレ」や純米吟醸「苗場山」が実際に販売されている様子をご覧いただきました。夕食は、かたくりの宿にて、地域おこし協力隊によるYouTube動画の紹介や2日間案内を行うジオガイドの方と意見交換をしていただきました。



切明の川原で温度を計測

らかとなった災害の痕跡や善光寺地震の様子、長野県北部地震の様子をご覧いただき、防災学習の場としての位置づけを紹介しました。夕食は、しなの荘にて、ジオガイドとさらなる意見交換をしていただき、外から来られた土地勘のない方への説明方法や問いかけを交えながらお客様が発見するガイド方法などご教示いただきました。

3日目は信濃川にて、ジオラフティングの取り組みや2年前の水害の状況など説明しました。その後、津南小学校前の展望地へ移動し、対岸の地形の説明を行いました。途中経過では、津南町役場にて会長・副会長との意見交換も行われました。その後、川の展望台へ行き、河岸段丘の説明やGEO河岸段丘花火、雪散歩などのイベント活動も紹介しました。最後に、津南町役場に戻り、ユネスコジオパークの認定基準となる自己評価表の確認を行い、ジオパークにとってどのような活動が必要かを調査員とジオパーク関係者全員で共有しました。この3日間、来年度に再審査を迎えられる恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークの担当者2名も同行し、苗場山麓ジオパークと一緒に巡り、当地域を知っていただきました。

この4年間の活動は、実績に基づき評価される内容だと思います。特に、小学生児童によるジオカードの作成、ジオガイド認定検定の最年少での合格などジオ学習の成果は上がり、地域の方々や商店にも波及しています。また、審査を通じて、より良いジオパークにするための課題も浮き彫りになっています。審査結果は、今年度中に発表される予定です。それを受けて、今後4年間のさらなる進化、深耕を進めていく必要があります。

【苗場山麓ジオパーク推進室・佐藤 信之】



認定商品と連携したジオカードの説明



＜室長日誌 一再認定現地審査を迎えて＞

前年度にプレ再審査を実施し、様々な課題が浮き彫りになった。その課題の内容と改善優先度を整理しながらも予算的限界を背景に歯がゆい思いをしながら「身の丈にあった」を合い言葉に走ってきた。そして、11月8日～10日に掛けて第2回現地再認定審査を受けた。その前段階としてリモートで自己評価表の検証作業を行った。これにより再審査の調査員の方々と触れ合い、その後の白山手取川ジオパーク全国大会で名刺交換を直接行うことができた。この前段階の人的交流は、現地再審査段階で調査員と初対面でない関係性を作り出すことができ、心強かった。ありがたい限りである。

さて、再審査から1週間が過ぎようとする今、私なりに何を思っているか。備忘録として書きとめておきたい。

まずは「ホッ」とした気分であり、当日は今更焦っても駄目であり「まな板の鯉」だと言い聞かせていた。蓋を開けてみれば、資源探査部会、商品開発部会、広報部会、ガイド部会の部会長は、皆胸を張り、自らの言葉で「活動とその意味合い」を力強く発言され、涙が流れた。心配していた気持ちはどこへやら、誇らしげな気分になされた。

ジオパーク域を歩き、ガイドがひとつひとつ丁寧に説明している様子が鮮明に浮かび上がる。中条川崩壊地と震災復興祈念館「絆」での災害担当久保田さんの明朗、首尾一貫した説明は、審査委員をうならせ「さらに栗駒山麓ジオパークに学び、内陸盆地型災害学習拠点として整備いただきたい」との言葉を引き寄せた。次なるステップへの課題が見えた瞬間であった。

また、ラフティングと地層観察を融合させた「ジオラフティング」は、苗場山麓ジオパークの特徴的なアクティビティである。調査員の方にも体験いただく予定で計画してきたが、再審査実施期間が11月にずれ込んだことで寒くて難しいとの判断で川辺での説明に変更した。ここでも、地層観察だけではなく、「なぜ、信濃川がここに流れるのか」、「なぜ、瀬があり、淵があるのか、その背景にジオ環境がある。それを説明いただくと、もっと魅力が増す」とのご教示をいただき、目から鱗の一瞬であった。

観光の取り組みに対して「プロモーション」「マーケティング」という抽象的な言葉で改善指導が出された第1回再審査から、「予算的制約の中で何をどのように取り組む必要があるのか」自問自答し焦るばかりの日々であったことを思い出す。それと裏腹に観光部局では、ジオ学習と商品開発を絡めた「ジオカード戦略」や「山コーヒー×レンタサイクル」「中津川左岸散策道の将来性の検討」「GEO河岸段丘花火」など具体的な取り組みを累積し、その内容を詳細に力強く伝えていただいた。私の不安は解消し、ただただ、観光部局の取り組みに深謝するばかりであった。また、将来これらは苗場山麓における資源保全型ツーリズムへの布石であり、その

基盤こそ雪国観光圏が提唱する「雪国リトリート」の「真白き世界で、ここをリセットする」とことと深く関連すると理解している。

「内向きのガイド」から「外向きのガイドによるインタープリテーション」の必要性を具体的にご教示いただいたことも大きな財産となった。また、例えばガイド部会と商品開発部会との融合など、「各部会が融合することで新しい動きが生まれるであろう」とする予測的ご教示も重要な視点であった。

3日間の現地審査における長谷川修一調査員・大野希一調査員との触れ合いとご指導は、本ジオパークがこれから地域創りを進める大きな糧となった。再審査の結果は、12月中旬頃に発表されるのである。来年度の活動を練り直しながら、静かに待ちたいものである。



谷の展望台



こらっせ



総括の様子

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

坪内 大地さん



私にとってのジオサイト（ガイド No.47 坪内 大地さん）

まずはなぜ私がジオガイドになろうと思ったか？をお伝えしたいと思います。

私はそもそも大阪生まれ。趣味の登山で長野県の山の魅力に惹かれ、地域おこし協力隊として8年前に秋山郷に移住してきました。その時思った事は、一体自分自身がどんな場所に住むのだろう？という事でした。移住前には勿論、秋山郷、栄村の事はインターネット等で調べましたが、所詮は公開された情報に過ぎません。恥ずかしながらジオパークの事も移住後に知った次第です。そんな私の疑問を解決してくれたのがジオガイドの存在でした。

早速、ガイド検定試験を受ける為に事務局を訪ね、過去問題やガイド研修資料をいただき、冊子を開いてみると、地形的な成り立ちや歴史、文化、そこに住まう人、生き物等、私の求める魅力的な情報に満ち溢れていました。

検定合格後、そこで得た知識を使いガイドを行う機会が幾度かありました。そんなある時、“認定ガイドではないが秋山郷生まれ”と言うゲストの方と2名でガイドする事がありました。2人は全く対照的で、私は冊子で覚えた数字や知識でのガイド、片や昔話も交え実体験を活かしたガイド。圧倒的に後者の方が面白く、私は途中から「これは聞き逃すまい！」と、その方の話をこっそり録音。何度も聞き返し、その逸話を覚えたものです。一度、津南小の児童の皆さんをガイドする機会もあり、後日、お便りをいただき非常に嬉しかった事もありました。この様に、自身が楽しみながら知る喜び、人に伝える喜びを与えてくれるのがジオガイドだと思っています。

遅くなりましたが“私の好きなジオパーク”ですが、ジオサイトと言うよりも、秋山郷の暮らし、なかでも冬の暮らし・文化が一番好きでした。それは、この豪雪地に住みその苦労を味わっても変わりませんでした。屋根の雪下ろし、薪作りなどの生活文化、十二講などに見られる山岳信仰文化、狩猟文化など、雪と共にある暮らしぶりは数えあげればきりがありません。また、晴れた日には自宅の庭に雪洞を作ったり、ジオサイトで言う所の“天池展望台”まで歩いたり雪と遊ぶ事も忘れてはいけません。結局のところ、秋山郷の生活そのものが私にとってのジオサイトでした。

過去形の文章で書いたのには理由があり、実はこの春、個人的理由により秋山郷を離れ、近隣の積雪の少ない某北信の町に移った為、今年の冬からは雪の少ない生活となります。きっと秋山郷の雪が恋しくなる事でしょう。最後に、活力のある地域と言うのは若い人達に活気があります。願わくば20～50歳代の地域の“若衆（わけしょ）・女衆（おんなしょ）”に、自身の住む地域がこんなに素晴らしい所であり、こんな素晴らしい伝統文化があると、もっと貪欲に興味を持って行動して欲しいと思います。その結果がジオパーク認定ガイドであるならば、こんなに素晴らしいことはありません。





全国研修会in栗駒山麓へ参加しました（会場：栗駒山麓ジオパークビジターセンター）

11月21日（月）～23日（水）の3日間、宮城県の栗駒山麓ジオパークにて全国研修会が開催されました。テーマは、「ジオパークにおける地質遺産の保全と活用を考える」でした。経験者コースに参加し、「サイトを守るための方法を知る」手がかりを学んできました。題材は、2008（平成20）年に起きた岩手・宮城内陸地震に伴って生じた荒砥沢地すべり地です。サイトを巡検した上で、保全すべき対象とその価値や脅威、保全する手法と担い手についてグループディスカッションを通じて理解を深めました。グループワークでは、グループごとにジオパーク各所のサイト（当班：隠岐の島の久保呂海岸のゼノリス礫）を1ヶ所取り上げ、どのような内容の保全計画にするか項目（目次）づくりを行いました。その際、①計画において守るべき対象物は明確か②その対象物のもつ価値は明確か③その価値を損ないかねない脅威は明確か④その脅威を除く方法は明確か⑤計画の担い手（ステークホルダー）は明確かの順に議論とまとめ、発表を行いました。苗場山麓では、4年前の再審査に際して「ジオサイトカルテ」を作成しツアーや校外学習に利用しています。次年度以降は、サイトの保全計画とその利用が苗場山麓のジオパークの一つの課題となってきます。



荒砥沢地すべり地の露頭

また、サイトの保全については、今も継続しているモニタリングシートの活用が重要であることを確認しました。苗場山麓では、サイトの保全計画は手つかずですが、重要なサイトから少しずつ作成していこうと考えています。

さて、荒砥沢地すべりの巡検において、苗場山麓の「笹葉峰の大崩壊と地すべり」その規模と広がり、小生の頭中を巡っていました。確かに、笹葉峰の大崩壊の規模がひと回り大きいことを実感したところです。

また、生態遺産の事例として、冬季にマガンをはじめとする水鳥が飛来するラムサール条約登録湿地の伊豆沼・内沼を見学しました。マガンの群れの多さとその飛行の速さに、また「びっくり」させられたところです。

道中、栗駒山麓の農村に多く見られる長屋門の一つに立ち寄りました。当地域の風景とは言うものの大きな屋敷の門を見るにつけ、豪農のかつての姿を想像したところです。

【専門員・仲野 浩平】



突撃しよう!となりのジオ便り～鳥海山・飛島ジオパークからこんにちは～（事務局次長兼主任研究員 大野 希一）

当ジオパークは、秋田県と山形県の県境に位置する日本ジオパークで、2016（平成28）年に認定されました。当ジオパークの地形・地質学的特徴は、日本海が形成・拡大した頃にできた砂泥互層および同じ時期に噴出した火山岩類と、約60万年前から活動が続ける鳥海山（標高2,236 m）の火山地形です。お勤めは岩屑なだれがつくった流れ山地形です。日本海を渡る季節風が鳥海山にぶつかることでもたらされた大量の雪が、全ての動植物の命の源となる水を麓にもたらし、さらにその水が、当ジオパークの自然環境や農水産物、さらにはそれらを活用した特産物など、人々の生活にまつわる多くの見どころをつくっています。



火山岩類

当ジオパークのエリアでは、約90年前に大変興味深い観測が行われました。

地球の表面が複数のプレートに覆われ、それらが動くことによって、地震や火山噴火はもちろん、日本列島の成り立ちをはじめとする多様な地球現象の理由が説明できる、ということは、多くの方がご存じだと思います。1968年に提唱され、地球現象を語るうえで必要不可欠ともいえる「プレートテクトニクス理論」は、ドイツの気象学者・ウェゲナーが1912年に発表した「大陸移動説」に端を発します。ウェゲナーは大陸の形に加え、化石の分布や氷河が流れた跡の向きから、一つの超大陸が分かれ、移動することで現在の姿がつけられた、と唱えました。しかし大陸を水平方向に動かす原動力が説明できなかったために、この説は当時の地質学者には受け入れられませんでした。日本ではあまり注目されなかったこの説に興味を抱いたのが、「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を遺した、地球物理学者の寺田寅彦です。

イギリスへの留学中にこの説に出会い、感銘を受けた寺田は、「日本列島は大陸から離れるように動いているのでは」と考えました。そして、山形県の飛島と酒田、そして秋田県の三崎山の3か所で、1928年と1934年に天文観測による緯度・経度の測量を行い、自らの考えを立証しようとした。残念ながら当時の観測精度では大地の動きを示す結果は得られませんでした。約90年も前に日本海の形成・拡大を考えた寺田の識見の鋭さと、それを立証しようとした行動力には驚かされるばかりです。



飯森山・山頂

酒田市内の飯森山の山頂に行くと、大地の動きを見出そうと、丁寧に測量を続ける寺田の姿が見えてくるようです。